デーリー東北新聞社提供

デーリー東北
2025年（令和7年）11月20日（木曜日）（20）

救急車 敷地内通行円滑に

八戸市民病院、八工大と共同研究

救急車のスムーズな通行に向け、現状を報告する学生＝19日、八戸工業大

八戸工業大と八戸市立市民病院は、救急車が病院敷地内をスムーズかつ安全に通行できる環境整備に向け共同研究を進めている。救命救急センター前で発生する車両と歩行者の混雑について、学生発案のユニバーサルデザインで改善し、救急患者の迅速な受け入れと事故リスクの低減を目指す。

同病院の今明秀事業管理者によると、救命救急センターには年間約7千件の救急車が停車する。センター前の横断歩道は人と車両の往来が激しく、救急車が人の横断を待つ時間が患者搬送の妨げになるケースがあるという。同大工学部の浅川拓克教授への相談を機に共同研究に着手。学生主体のプロジェクトとして、同大工学部と感性デザイン学部の学生が参加する。

19日、今事業管理者ら病院関係者が大学を訪問。プロジェクトリーダーを務める工学部4年の藤田蒼也さん(22)が実態調査とアンケート結果を発表した。

センター前の横断歩道付近をカメラで撮影して分析した結果、9月上旬1週間の日中、延べ1万2504人が横断歩道を渡った。救急車の到着時、71件のうち8件が歩行者の横断待ちで止まった。

八戸消防本部の管轄地域で救急車を運転する人を対象にアンケートを実施。人や車両の通行に危険を感じたことがあるとの答えは約3割あった。「搬送中、敷地内を進行する際に歩行者や車両の通行を待つことがある」との回答は8割以上に上った。待つことで傷病者の体調が悪化したとする声は少ない一方、「同乗家族の心情に影響があるように感じる」との意見があった。

藤田さんは歩行者側、車両側双方からの視認性の悪さなどを課題に挙げ「ユニバーサルデザインによる表示が必要」と提案した。引き続き、参加者同士で意見交換した。

大学側は来年1月の発表会で最終案を公表する予定。取材に対し、今事業管理者は「実用的で世界が驚くような八戸独自のデザインに期待したい」と話した。（船渡拓）

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。